

論説

漢代淮北平原の地域開発

—— 陂の建設と澤 ——

村松弘一

一 はじめに

三国鼎立以来分裂していた中国を西晋が統一する直前の咸寧四年（二七八年）、当時度支尚書の立場にあった杜預は淮北平原において毎年続く水害の対処策を上疏した。この上疏で彼は水害の原因が淮北平原における陂池の乱開発にあり、その原因たる陂池を決壊させることが重要であると述べている。つまり、この水害が人為的な災害であるとの認識を示したのである。しかしながら、杜預はすべての陂池を破壊せよと言っているわけではない。彼は漢代以前の陂と魏以降建設された陂に分け、漢代からの旧陂旧堰と山谷私家の小陂は修繕して蓄水すべきであるが、魏代以降造られたものと雨がふると決溢する蒲葦が生育し馬の腸のように長くなってしまった陂の類は決壊して流すべきであると主張している。漢代は水陸のバランスをうまく保つように陂が建設されていたが、魏以降はそのバ

ランスを失わせるほど過剰な乱開発が行われ、その結果、水害が発生したと考えた。そこで、彼は再び統一を達成させるためにも、漢代の地域開発の方法へと回帰すべきであると主張したのである。⁽¹⁾

果たして、この杜預上疏における漢代に建設された陂に関する分析はどれほど漢代の実情を示したものであろうか。そして、彼が主張するように漢代の淮北平原における開発の方法はその地域の環境に適合したものだのだろうか。本稿ではこのような問題について検討するため、杜預上疏が提出された魏晋期から時間軸を戻し、漢代における淮北平原の地域開発について陂の建設を中心に考察することとしたい。陂とは人工的に河流を堰き止めて造られたダム型式の貯水池を示す。⁽²⁾ すなわち、陂は自然環境に人間が手を加えて建設されたものである。これに対して澤は自然の池を中心として、周辺の森林や沼などの低湿地をも含めた複合的な生態系で、人の手が加えられていないところ、すなわち開発が進んでいない地区と考えてよい。⁽³⁾ 従来の研究では陂池開発は漢代より本格的に始まり、後漢時代にはその規模を拡大させたこと、淮北平原と南陽盆地に多くみられること、また、その分布地は後漢以後、豪族が台頭する地域と一致することなどが明らかにされている。⁽⁴⁾ 本稿では陂を社会関係や権力の経済的基盤として見るのではなく、人間が如何に周囲の自然環境を利用してきたのか、もしくは利用しなかったのかを示す史料として考察をすすめたい。それはある環境に対して当時の人々がいかなる認識をもって開発をすすめていったのかを示すこととなる。

そこで、本稿ではまず、第二節で人間による開発を示す陂の分布を整理し、第三節では未開発地域を示す澤の分布を整理する。第四節ではこの陂と澤の分布地区の相違についてそれぞれの形成・建設過程と周囲の生態環境との関係を考察したい。

二 漢代淮北平原の陂池建設

淮北平原は北を河水（黄河）、南を淮水、西を嵩山—桐柏山山系（豫西丘陵）、東を山東丘陵に挟まれた平原である。現在の行政区分では河南省東部・安徽省北部・山東省西部にあたる。高低差約二〇メートルほどのこの平原では春秋時代に鄭・衛・宋・陳・蔡などの国々がしのぎをけずり、戦国時代には魏・楚・宋・斉などが攻防を繰り返して、秦末の陳勝・呉広や劉邦もここから蜂起した。また、漢代には多くの諸侯国が置かれた地域でもある。

さて、ここでは漢代の淮北平原に分布した陂を整理したい。漢代に史料上存在していた陂は八件みられる。それらを整理したものが「表1」、「地図1」である。⁵⁾ おおよそ、その分布地域は汝南・潁川郡と下邳国（臨淮郡）の二つの地域に区分できる。以下、各々の陂の履歴について分析する。

〈A地区 汝南・潁川郡〉

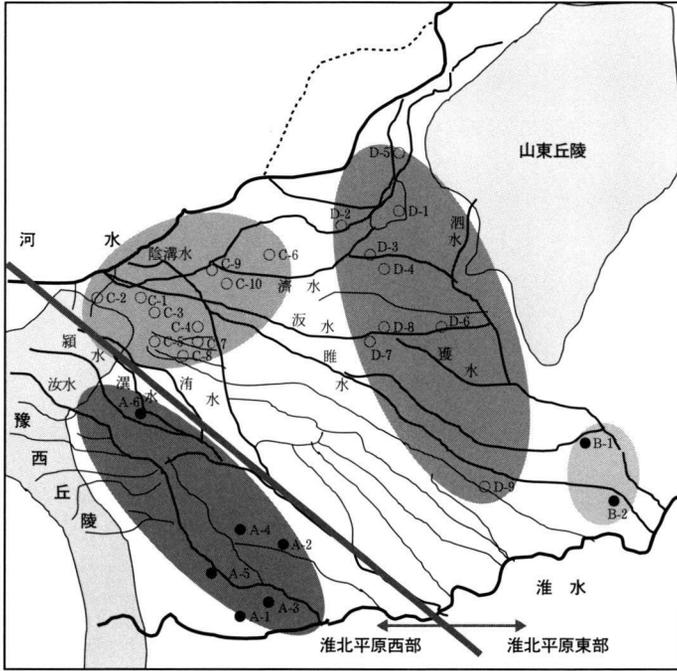
汝南郡は西に豫西丘陵地帯、南に淮水流域の低地が広がり、西北から東南へむかってなだらかに傾斜する地形である。汝水とその支流の潤水、そして潁水が東南流して淮水に流れ込む。郡治は前漢・後漢ともに平輿県に置かれた。なお、ここには特に多くの陂が複雑に分布するため、『水経注』の記載で補いながら位置を確かめたい。汝南郡内に分布する陂に関する『水経注』記事を「表2」として挙げる。また、「地図2」は楊守敬『水経注図』の汝南郡の部分を一部改変したものである。

A—① 鴻郤陂（鴻隙大陂） 汝南郡慎陽・安陽・新息

初め汝南に旧鴻隙大陂有り、郡以て饒為り。成帝の時、関東しばしば数水あり、陂溢れて害と為る。（翟）方進相と

表 1 漢代淮北平原陂澤分布表

	名 称	所 在 地	引用史料出典
陂			
〈A地区 汝南郡・潁川郡〉			
①	鴻郤陂(鴻隙大陂)	汝南郡安陽・慎陽・新息	『漢書』翟方進伝・『後漢書』鄧晨伝・方術伝
②	鮑陽陂(鮑陽渠・三丈陂)	汝南郡鮑陽	『後漢書』何敞伝・『北道書鈔』引華嶠『後漢書』・『水經注』
③	青陂	汝南郡新蔡	『水經注』汝水注
④	葛陂	汝南平輿・鮑陽	『後漢書』費長房伝・『三国志』魏志・許褚伝
⑤	周氏陂	汝南郡安城	『後漢書』周夔伝
⑥	灌夫陂池	潁川郡潁陰	『史記』魏其武安侯列伝
〈B地区 下邳国〉			
①	蒲姑(如)陂	下邳国取慮	『後漢書』郡国志・『春秋左氏伝』杜預注
②	蒲陽陂	下邳国徐	『後漢書』張禹伝・『後漢書』張禹伝注引『東觀漢記』
澤			
〈C地区 河南・陳留郡〉			
①	榮(葵)澤	河南郡宛陽	『後漢書』郡国志
②	馮池	河南郡宛陽	『漢書』地理志・『水經注』
③	圃田澤	河南郡中牟	『漢書』地理志・『後漢書』郡国志
④	逢池(逢澤)	河南郡開封	『漢書』地理志
⑤	制澤	河南郡開封	『後漢書』郡国志
⑥	長垣澤	陳留郡長垣	『後漢書』呉祐伝
⑦	牧澤	陳留郡浚儀	『水經注』渠水注引『陳留風俗伝』
⑧	長楽廡大澤	陳留郡尉氏県	『水經注』渠水注引『陳留風俗伝』
⑨	黄池	陳留郡平丘	『後漢書』郡国志
⑩	東昏大澤	陳留郡東昏県	『後漢書』儒林・楊倫伝
〈D地区 山陽・濟陰郡・沛国・梁国〉			
①	鉅野澤(大壑澤・大野澤)	山陽郡鉅野	『史記』夏本紀集解・『漢書』地理志・『後漢書』郡国志
②	雷澤	濟陰郡成陽	『漢書』地理志・『後漢書』郡国志
③	荷澤	濟陰郡定陶	『漢書』地理志
④	成武大澤	濟陰郡成武県	『後漢書』儒林列伝・孫期伝
⑤	河澤(東阿大澤)	東郡東阿	『春秋左氏伝』杜注
⑥	豐西澤(大澤)	沛国豐	『後漢書』郡国志
⑦	蒙澤	梁国蒙	『後漢書』郡国志
⑧	盟諸澤	梁国睢陽	『漢書』地理志。孟諸澤・明都澤
⑨	大澤(郷)	沛国豐県	『後漢書』郡国志



- | | | | |
|---|------------|---|----------------------|
|  | A地区 汝南・潁川郡 |  | C地区 河南郡・陳留郡 |
|  | B地区 下邳国 |  | D地区 山陽郡・濟陰郡・東郡・沛国・梁国 |

地図1 漢代淮北平原陂澤地図

為り、御史大夫孔光と共に掾を遣わし行視せしめ、以為えらく「陂水を決去せしむれば、其の地肥美となり、堤防の費を省き、而して水憂無からん」と、遂に奏してこれを罷む。

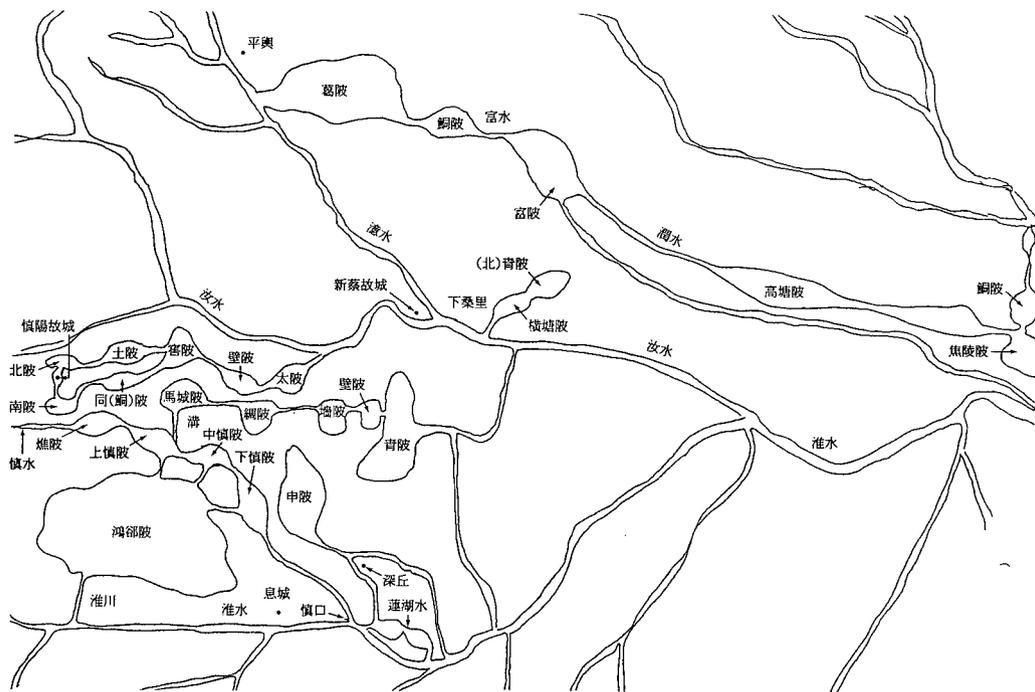
『漢書』翟方進⁽⁶⁾伝

翟方進は前漢成帝期の人。鴻郤陂（鴻隙大陂）はすでに成帝以前に造られていたが、成帝期の大雨により度々陂が横溢して水害を生させた。これをうけて丞相の翟方進は陂を決壊させれば水害の憂いは無くなると上奏し、陂を破壊した。しかし、そのち陂による貯水ができなくなり、王莽期には常に旱魃が発生するようになり、人々は翟方進を怨んで童謠を作っ

表2 『水経注』記載汝南郡陂池史料

	史 料	出 典
(1) 慎水	(慎) 水出慎陽縣西、而東逕慎陽縣故城南：慎水又東流、積為雒陂。陂水又東南流為上慎陂、又東為中慎陂、又東南為下慎陂、皆與鴻郤陂水散流。其陂首受淮川、左結鴻陂；陂水散流、下合慎水、而東南逕息城北、又東南入淮、謂之慎口。	『水経注』 淮水注
(2) 申陂水	(申陂) 水上承申陂于新息東北、東南流分二水。(水は(2)―(1)へ) 一水逕深丘西、又屈逕其南、南派為蓮湖水、南流注于淮。 (申陂枝) 水首受(申) 陂水于深丘北、東逕鈞臺南。…又東逕陽亭南、東南合淮。	『水経注』 淮水注
(3) 青陂水	(青陂) 水上承慎水于慎陽縣之上慎陂、左溝北注馬城陂、陂西有黃邱亭。陂水又東、逕新息亭北、又東為網陂。陂水又東逕新息、結為鵝陂。陂水又東、逕遂鄉東南、而為壁陂。又東為青陂。…陂水又東、分為二水、一水南入淮、一水東南逕白亭北、又東、逕吳城南。…又東北屈逕壺邱東、而北流注于汝水。	『水経注』 汝水注
(4) 汝水	(汝) 水首受慎水于慎陽縣故城南陂。陂水而分、(一) 水は(4)―(1)へ (二) 水は(4)―(1)へ 自陂東北流、積為同陂。陂水又東北、又結而為陂、世謂之窖陂。陂水又東南流、注壁陂。陂水又東北為太陂。陂水又東入汝、一水自陂北、慎陽城四周城塹：塹水又自潰東北流、注北陂。…(北) 陂水上承慎陽縣北陂、東北流、積而為土陂。陂水又東為窖陂。	『水経注』 汝水注
(5) 澧水	(澧) 水上承汝水別流于奇額城東、東南流為練溝、逕邵陵縣西、東南流注、至上蔡西岡北、為黃陂。陂水東流于上蔡岡東蔡塘。又東平輿故城南：澧水又東南、左迤為葛陂。陂方數十里。…(葛) 陂水東出為銅水、俗謂之三丈陂、亦曰三嚴水。水逕銅陽縣故城南：銅陂東注為富水(富陂)：澧水自葛陂東南、逕新蔡縣故城東、而東南流注于汝水。	『水経注』 汝水注
(6) 潤水	(潤) 水首受富陂、東南流為高塘陂、又東、積而為陂水、東注焦陵陂。焦湖東注、謂之潤水、逕汝陰縣東、逕荆亭北、而東入淮。	『水経注』 淮水注
(7) 焦陵陂水	(焦陵) 陂水北出為銅陂、陂水潭漲、引瀆北注汝陰、四周陸塹、下注潁水。	『水経注』 淮水注

(傍線部は陂。ゴシックは漢代より存続したと考えられる陂。淮水沿岸から潁水沿岸方面へ東北方向に配列した)



地図2 『水経注図』汝南郡周辺（一部改変）

たという⁽⁷⁾。このような状況のなかで、後漢初期、鄧晨なる人物がこの陂の修復をおこなった。『後漢書』鄧晨伝に

(建武十三年) 復た汝南太守と為る…… (建武十八年) (鄧) 晨、鴻郤陂の数千頃の田を興し、汝土以て殷たり、魚稻の饒は它郡に流行す⁽⁸⁾。

とある。鄧晨は南陽新野の出身で、光武帝の姉を娶った人物。王莽末年から光武帝に従軍し、建武二十五年に卒した。建武十三年に汝南太守となった彼は鴻郤陂を修復し、それによって数千頃の田が灌漑され、そこから生産される魚・稻はほかの郡にも流通したという。さらに、この修復工事では翟方進の破壊により、すでにかつての鴻陔大陂の水利施設の構造がわからなくなってしまっていることから、現地の水脈に詳しい許楊なる人物が指揮に当たった。許楊は同じ汝南郡の平輿県の出身。年少から術数を好み、漢末に王莽のもとで酒泉都尉になったが、新の滅亡後には郷里に戻っていた。ちょうどその時、この鴻郤陂の修復工事が行われたのである(『後漢書』方術・許楊伝⁽⁹⁾)。この陂の所在地については正史では汝南としか記されていないが、『水経注』淮水注には、慎陽故城の南を過ぎた慎水が雉陂・上慎陂・中慎陂・下慎陂を形成し、その水が鴻郤陂に散流すると記載があり、慎陽県の東南にあると考えられる(『表2』(1)慎水参照)。また、楊守敬『水経注図』では汝水と淮水の間、汝南郡安陽・慎陽・新息の間に示されている⁽¹⁰⁾。

A-② 鰲陽陂 汝南郡鰲陽県

何敞汝南太守と為る、鰲陽の舊陂を修治して、漑田萬頃、墾田三萬餘、咸^みな其の利に頼る。吏民石に刻して、敞の功德を頌す。(『北堂書鈔』卷七四引華嶠『後漢書』何敞伝⁽¹¹⁾)

何敞は扶風平陵の出身。その六世の祖先である何比干は汝南郡汝陰県の人で、本始元年に扶風平陵に徙民された(『後漢書』何敞伝注引『何氏家伝』)。何敞が汝南太守になったのは永元年間以前、後漢安帝期である。鰲陽陂は

『後漢書』では「鮑陽旧渠」、「水経注」汝水注では「三丈陂」「三嚴水」と称されている。汝水と潁水の間を流れる葛陂水沿いに位置し、南岸に鮑陽県がある（『水経注』汝水注、「表2」（5）潁水参照）。

A-③青陂 汝南郡新蔡

漢靈帝建寧三年、新蔡長河南緱氏の李言、青陂を修復せんことを上請す……灌漑五百餘頃。（『水経注』汝水注¹²）
李言は河南尹緱氏県出身で、後漢末期の靈帝時期には汝南郡新蔡県長となった人物。彼の在任中、青陂の修復を上奏し、その結果、五百餘頃が灌漑されたという。青陂は慎陽県の上陂を水源として次々と小規模な陂を経由して汝水・淮水へと入る陂で、新蔡県の東南に位置する（「表2」（3）青陂水参照）。

以上三件の陂は主に灌漑用水のために造られたものである。次に挙げる例は世俗社会から離れて生活する場としての陂である。

A-④葛陂 汝南平輿県・鮑陽県

（費）長房辞して帰すに、翁は一竹の杖を与えて曰く「此れに騎して之く所に任せば、則ち自ら至らん。既に至らば、杖を以て葛陂中に投すべきなり」と。（『後漢書』方術・費長房伝¹³）

費長房は汝南の出身で、薬を売る翁とのやりとりのなかでこのような一節が記されている。葛陂の位置は『後漢書』の注には「陂は今の豫州新蔡県西北に在り。」とあり、また、『水経注』汝水注によると、汝水の東を東南方向に流れる潁水という河川が平輿県の南で分流して、左手に滞留した貯水池が葛陂であるという。この葛陂を経てからは葛陂水となり、鮑陽陂・鮑陽県を経て富陂を通り淮水へと流れ込む（『水経注』汝水注「表2」（5）潁水）。つまり、葛陂は平輿・鮑陽に位置することとなる。また、後漢末には許褚が曹操麾下となる以前に汝南葛陂の賊万余人を率いたとあり（『三国志』魏志・許褚伝¹⁴）、葛陂は世俗社会や国家とは離れた陂として史料にみられる。

A—⑤周氏陂 汝南郡安城

先人の草廬の岡畔に結す有り、下に陂田有り、常に肆に勤めて以て自給す。身ら耕漁する所あらざれば則ち食さず。〔後漢書〕周燮⁽¹⁶⁾傳

周燮は汝南郡安城県の出身で、十歳で学問をはじめ、逸民的な生活を送っていた。その際に、「陂田」で自給自足生活をしていた⁽¹⁶⁾。安帝の延光二年に招聘されたが、病を理由に断ったという逸話があることから、後漢中期の人物である。安城県は汝水の南岸の都市。

以上、汝南郡には具体的な名称のわかる陂が5件ある。そのほかにも後漢時代、汝南郡には多くの陂が存在していた。『後漢書』鮑昱⁽¹⁷⁾伝に、

(鮑昱) 後に汝南太守を拜す。郡に陂池多く、歳歳決壊し、年常に三千餘萬を費す。昱乃ち上に方梁石沚を作り、水常に饒足し、溉田倍多にして、人以て殷富たり⁽¹⁷⁾。

とあり、鮑昱が汝南太守となったとき、郡内に多くの陂があったが毎年のように決壊し、多額の修復費がかかった。そこで鮑昱は「方梁石沚」を作り、そのおかげで水が常に充足し、郡内の灌漑面積が増し、豊かになったとい⁽¹⁸⁾う。鮑昱は後漢王朝創始の重臣であった鮑永の子で上党郡屯留県の出身。太行山にあらわれる山賊を撃退したことから名を挙げ、光武帝の中元元年(五六年)には司隸校尉となる。明帝の永平五年(六二年)に免ぜられたが、その後、汝南太守となった。すなわち、鮑昱が赴任した後漢初期にはすでに汝南郡には多くの陂が建設されていたことがわかる⁽¹⁹⁾。

つぎに、潁川郡は洛陽の東南、嵩山の南に位置し、嵩山から南へ続く丘陵の一部である。郡には汝水の上流域と潁水本流の上流およびその支流の潁水・洧水が西北から東南方向へ流れている。郡治は陽翟に置かれた。

A—⑥灌氏陂 潁川郡潁陰県

(灌夫の) 家は数千萬を累ね、食客は日に数十百人。陂池田園あり、宗族賓客は利を権るを為し、潁川に横す。
〔史記〕 魏其武安侯列伝⁽²⁰⁾

灌夫は潁陰の人、父の張孟は潁陰侯灌嬰の舎人となり灌氏の姓を蒙った。灌夫は景帝の呉楚七国の乱の際に頭角をあらわし、中郎将・代の相となり、武帝期には淮陽太守・太僕・燕の相を歴任した。この史料は灌夫が地元で権勢をふるっている様を描いている部分であるから、この陂は彼の出身地である潁陰県に所在することとなると思われる。潁陰県は潁水上流の北岸に位置する。

漢代の潁川郡の様子を描いた具体的な史料はこの一件である。ただし、『水経注』などの魏晋期の史料の中には漢代には建設されていた可能性が高いものがいくつも見られることから、漢代の潁川郡にも汝南郡同様、多くの陂が分布していた可能性は高い。

〈B地区 下邳国〉

下邳国は後漢に置かれた行政区で、前漢の行政区分では臨淮郡の西部にあたる。下に挙げる二例はともに後漢時代のものであるから、ここでは下邳国を地域区分の名称としておく。下邳国は淮水下流の平原地帯にあたり、東北からは山東丘陵に源を発する沂水、西北からは沂水・泗水・睢水が淮水に流れこむ地帯にあたる。後漢時代の郡治は下邳に置かれた。

B—①蒲姑(如)陂 下邳国取慮県

蒲姑陂有り〔統漢書〕郡国志下邳国取慮の条)

取慮県は睢水と泗水の合流点の西に位置する。この陂の建設者及び年代など詳しいことはわからないが、前漢以

前の史料には見られないことから、後漢代に建設されたものと考えられる。

B―②蒲陽陂 下邳国徐県

(元和)三年、下邳相に遷る。徐縣の北界に蒲陽坡有り、傍に良田多し、而も墮廢して修むること莫し。(張)

禹為に水門を開き、通引灌漑し、遂に孰田數百頃と成る。(『後漢書』張禹伝)⁽²¹⁾

張禹は趙国襄国県の出身。永平年間から活躍しはじめ、建初中には揚州刺史となった。後漢章帝期の元和二年に兗州刺史となり、翌年(紀元後八十六年)下邳相となった。かつて徐県の北に蒲陽坡(『後漢書』の注には「坡」と「陂」は同じとある)があったが、張禹が赴任したときにはすでに廢れていた。彼はこれを修復し、大いに効果があったという。⁽²²⁾徐県は泗水と淮水の合流点の西に位置する。現在の淮水下流に位置する洪澤湖ほとりの泗洪県付近にあたる。

以上のように、淮北平原において漢代に建設された陂は八件確認される。その分布は汝水・潁水沿岸(A地区)に六件、睢水・泗水・淮水の合流する平原東南部(B地区)に二件であった。特に、潁水を基準線にその西に陂が多く分布していることは特徴的である。

三 淮北平原における澤の分布

澤は山林藪澤と総称されるように、山や森林・湖泊・低湿地などを複合的に有する自然環境を示す。『爾雅』釈地では十藪、『周礼』夏官職方氏では九州の澤藪、『淮南子』墜形訓では九藪などと様々な組み合わせで総称され、先秦時代の状況などを記載した史料にも見られる。⁽²³⁾ここでは、實際漢代の淮北平原にどのような澤が分布していた

のかということに注目する。そこで、漢代の史料に具体的な名称が現れる淮北平原の澤または池を整理してみると、十六件確認され、その分布地区はおおよそ二つに分けることができる〔表1〕〔地図1〕〔参照〕。

〈C地区河南郡・陳留郡〉

河南郡(尹)・陳留郡は河水の南岸にあたる。河水から引かれた渠水(鴻溝水)が東南方向に流れ、濟水・坂水・睢水に分岐するまでの地域に位置する、ここに十の池澤がある。

C-①熒澤(熒澤) 河南郡熒陽県

熒澤有り。(『統漢書』郡国志河南尹熒陽県の条)

熒澤は『尚書』禹貢に「滎波既澤」とあるもの。滎陽県は河水の南に位置し、ここから東南方向へ鴻溝が建設された。そのため、淮水・長江流域の物資が集積し、敖倉がつくられ、楚漢戦争の際にはこの滎陽で長期間、両者の争奪戦が繰り広げられた。

C-②馮池 河南郡滎陽県

下水・馮池皆西南に在り。(『漢書』地理志河南郡滎陽県の条)

この馮池も滎陽に位置する。また、『水経注』濟水注には「礫石溪)水、滎陽城の西南李澤より出づ。澤中水有り、即ち古の馮池なり」とあり、『水経注』時代には李澤と呼ばれる澤があり、そのなかにある水池がかつての馮池と認識されていたのである。

C-③圃田澤 河南郡中牟県

圃田澤、西に在り、豫州藪なり。(『漢書』地理志河南郡中牟県の条)

圃田澤は『爾雅』釋地第九に「鄭圃田有り」とある。中牟県は滎陽と開封の中間にあたる。この澤は鴻溝の南岸

に広がる澤であった。

C—④逢池（逢澤） 河南郡開封県

逢池東北に在り、或いは宋之逢澤を曰うなり。〔漢書〕地理志河南郡開封県の条

逢澤は前四世紀に「逢澤の遇」、「逢澤の会」とよばれる会盟がおこなわれた地である。前漢の開封県は現在の開封市よりもやや南に位置し、逢澤は開封県と陳留県の間に位置する。陳留は鴻溝から睢水が分流する地点にあたる。

C—⑤制澤 河南郡宛陵県

制澤有り〔統漢書〕郡国志河南郡宛陵県の条

宛陵県は潁水に東から合流する洧水の東にあり、制澤は『水経注』によれば「宛陵県故城」二城以東、悉く陂澤多し、即ち古の制澤なり。」とあり、宛陵県と陳留郡尉氏県との間に位置する。

C—⑥長垣澤 陳留郡長垣県

〔吳祐〕常に豕を長垣澤中に牧し、經書を行吟す。〔後漢書〕吳祐伝

吳祐は陳留長垣の人、のちに河間の相になる。父の死後、ブタを飼っていた故郷の澤が長垣澤であった。長垣県は濮水と濟水の間にある。⁽²⁴⁾

C—⑦牧澤（蒲閔澤） 陳留郡浚儀県

〔浚儀〕県倉頭・師曠城有り、上に列僊の吹臺有り、北に牧澤有り、中に蘭蒲出づ。上に僞髻多く、衿帯の牧澤は、方一十五里、俗にこれを蒲閔澤と謂うは即ち此を謂うなり。〔水経注〕渠水注引『陳留風俗伝』⁽²⁵⁾

とある。吹臺は前漢の梁の孝王が増築したものとの伝えがあり、その北に牧澤があり、浚儀県の東南に位置する。浚儀は戦国魏の大梁である。『史記』魏世家に「滎澤の水を決して大梁を灌すれば、大梁必ず亡びん」とあり、こ

これは前述の發澤を決壊させるだけで、水に覆われるほど大梁は低地に位置していたことを示している。また、『水経注』渠水注には「漢文帝孝王を梁に封ず、孝王土地下溼なるを以て、東のかた睢陽に都し、又改めて梁と曰う。」⁽²⁷⁾とあり、漢の諸侯王として梁（のちの浚儀）に封じられた孝王がその土地が低いことを理由に下流の睢陽に遷都したという。このように浚儀は低地に位置していた。浚儀県は鴻溝と陰溝水が合流し、鴻溝から汜水が分流する地点にあたり、水のターミナルともいえる場所である。それゆえ、「浚儀、周の時、梁伯国都を居く所、多く池沼あり」⁽²⁸⁾『太平御覽』卷三五四引『陳留風俗伝』とあるように、後漢時代に沼沢が多く分布していた。浚儀はほぼ現在の開封市にあたる。

C—⑧長楽殿大澤 陳留郡尉氏県

陵樹郷は故の平陸県なり。北に大澤有り、名は長楽殿と曰う。〔水経注〕渠水注引『陳留風俗伝』

この平陸県は前後漢代を通じて陳留郡には見られないが、『統漢書』郡国志陳留郡尉氏県の条注引『陳留志』に「陵樹郷有り、北に澤有り、澤に天子苑囿有り、秦の楽殿有り、漢の諸帝以て猛獸を馴養す。」とあることから、陳留郡尉氏県に長楽殿大澤があった可能性が高い。『水経注』渠水注では尉氏県東北に長楽殿大澤があったとする。尉氏県は洧水と鴻溝の間に位置し、その南を古制澤と沙水をつなぐ長明溝水が流れる（『水経注』渠水注）。

C—⑨黄池 陳留郡平丘県

黄池亭有り。〔統漢書〕郡国志陳留郡平丘県の条

黄池は單平公・晋の定公・呉の夫差が会盟し（『春秋左氏伝』哀公十三年）、戦国期には宋・魏・韓の抗争地となつたところである。⁽²⁸⁾後漢時代にはこの黄池のほとりに亭があったと考えられる。平丘県は濟水のすぐ北、長垣県西南に位置する。

C—⑩東昏大澤 陳留郡東昏県

(楊倫) 陳留東昏の人なり。……遂に職を去りて、復た州郡の命に応ぜず。大澤中に講授して、弟子千余人に至る。(『後漢書』儒林・楊倫伝)⁽²⁹⁾

楊倫は後漢の安帝期の人。大澤の位置はわからないが、楊倫が地元に戻って講授していたと考えれば、東昏県にあったこととなる。東昏県は河水の南、現在の河南省蘭考付近で、黄河の現河道が東から東北方向へ屈曲する地点にあたる。以上のように陳留郡には多くの澤が分布していた。⁽³⁰⁾

〈D地区山陽郡・濟陰郡・東郡・沛国・梁国〉

山陽郡・濟陰郡は淮北平原の東北隅にあたる地域で、鉅野澤を中心に雷澤・荷澤など五つの澤が分布する。沛・梁国は睢水・汴水流域に位置し、大澤・蒙澤・盟諸澤の三つの澤が分布している。『史記』貨殖列伝には「夫れ鴻溝より以東、芒・碭以北は巨野に属す、此れ梁・宋なり」とあり、この地区はまさに鴻溝の東と芒碭山の北に位置する場所であり、鉅野澤を中心とした藪澤群であると言える。

D—①鉅野澤(大壑澤) 山陽郡鉅野県

鄭玄曰く「大野、山陽鉅野の北に在り、名は鉅野澤」(『史記』夏本紀集解)

『漢書』地理志山陽郡鉅野県の条には「大壑澤北に在り、兗州藪」とあり、『尚書』禹貢では「大野既澤」と記されている。鉅野澤は彭越が常に漁した澤で(『史記』彭越列伝)、のちに『水滸伝』で有名となる梁山泊もこの付近に形成された湖泊である。鉅野県は濟水沿岸に位置する。

D—②雷澤 濟陰郡成陽

『禹貢』の雷澤西北に在り。(『漢書』地理志濟陰郡成陽)

『統漢書』郡国志濟陰郡成陽の条にもみられる。雷澤は舜が漁をしたとされる澤（『史記』貨殖列伝）で、『尚書』禹貢には「雷夏既澤、澠・沮会同」とあり、澠水と沮水が合わさって澤に流入していることを示している（『尚書』正義）。成陽県は濮水・瓠子河沿岸に位置する。

D—③荷澤 濟陰郡定陶県

『禹貢』の荷澤定陶の東に在り。（『漢書』地理志濟陰郡の条）

『尚書』禹貢に「滎・波既豬、道荷澤、被盟豬」とある。定陶は濟水の沿岸にあり、荷澤は濟水と泗水の分離点に位置する。⁽³¹⁾

D—④成武大澤 濟陰郡成武県

孫期、字は仲咳、濟陰成武の人なり。……家貧しく、母に事えること至孝たり、豕を大澤中に牧し、以て奉養す。（『後漢書』儒林列伝・孫期伝⁽³²⁾）

孫期は後漢末期の成武の人。地元の澤でブタを飼育していたという。成武県は泗水の南に位置する。

D—⑤河澤（東阿大澤） 東郡東阿縣

濟北東阿縣西南、大澤有り。（『春秋左氏伝』杜注）

これは『左伝』中に記載された「河澤」にたいする杜預の注である。⁽³³⁾『左伝』のまとめられた時期から西晋までの間、東阿県には澤が存在していたはずである。漢代の行政区画では東阿県は東郡内にあり、河水と瓠子水の間位置する。

D—⑥豊西澤（大澤） 沛国豊県

西に大澤有り。高祖、白蛇を此に斬る。（『統漢書』郡国志豫州沛国豊県の条）

劉邦の母はここで身ごもり、さらに、劉邦が驪山へと刑徒を護送中に自ら逃亡した豊西澤もこの大澤である（『史記』高祖本紀）。この大澤が秦漢交替期を演出した人物たちと関わりを持っていたことは興味深い。この澤は汧水から分かれた泡水沿岸に位置する。この澤の東には山東丘陵が広がり、現在では南北をつなぐ運河の一部をなしている微山湖・昭陽湖などがある。

D-①の蒙澤 梁国蒙泉

蒙澤有り（『統漢書』郡国志梁国蒙泉の条）

蒙澤は莊公十二年に宋萬が閔公を弑したところ。蒙澤は獲水（汧水）の水を受けて形成したもので（『水経注』獲水注³⁵）、蒙泉は雒水と汧水の間、現在の商丘市北に位置する。

D-②の盟諸澤 梁国睢陽県

『禹貢』の盟諸澤は東北に在り。（『漢書』地理志梁国睢陽県の条）

盟諸澤は文公十二年、宋の昭公が弑せられたところである（『春秋左伝』）。『尚書』禹貢には「導菏泽被孟猪」とある³⁶。睢陽県は現在の商丘市南に位置するが、この盟諸澤は汧水沿岸にある。前述したように睢陽県は前漢時代に梁の孝王が浚儀から遷都した都市である。その東南に竹園があり、それを人々は「梁王の竹園」と呼んでいたという（『水経注』雒水注）。これは梁の孝王が造った東苑（『漢書』・『西京雜記』では「兔園」ともある）とよばれる苑園である。近年、睢陽東南の芒碭山東南から前漢梁国の王陵墓群が発掘され、この孝王の陵墓も発見されている³⁷。芒碭山は睢陽東南の雒水と獲水の間位置し、海拔一五六メートル、南北一キロメートル、東西三キロメートルほどの山である。この山は劉邦や樊噲らが「芒碭山澤巖石之間」に隠れた（『史記』高祖本紀）場所、應劭は「芒は沛国に属し、碭は梁国に属す、二県の界山澤の固有り、故に其の間に隠る」（『漢書』高帝紀・注）とし、両県の

間には深い山林藪澤があったと想定できる。

D-9 大澤（郷） 沛国蘄県

大澤郷有り、陳勝此に起つ。（『後漢書』郡国志沛国蘄県の条）

この大澤郷は秦二世元年七月に陳勝等が蜂起した場所である（『史記』項羽本紀）。郷の名称から考えて澤があったと考えられる。沛郡（国）の東南部、芒碭山よりも南に位置する。

以上、淮北平原に分布する澤は二つの地区に整理される。河河南岸の河南・陳留郡の〈C地区〉、濟水・汲水・睢水が魯東丘陵にあたる地点にあたる山陽・濟陰・沛・梁国の〈D地区〉である。つまり、淮北平原西部には陂が多く分布したのに対して、東部には澤が集中していた。では、なぜ淮北平原西部には多くの陂が建設され、その一方で、東部は澤すなわち古くからの自然環境がそのまま残されたのであろうか。それは、それぞれの建設・形成過程とそれらが位置する地理的環境の差異によるものが大きい。つぎに、陂の建設される自然環境と澤の存在する自然環境の違いについて検討したい。

四 淮北平原の自然環境と開発の方法

陂と澤の成立する自然環境とはどのように異なっていたのであろうか。以下に、A、D地区の地理的環境の差異と澤・陂の成立過程について整理する。ここでも潁水を境界線としてその西を淮北平原西部、東を淮北平原東部として整理したい。

淮北平原西部にはA地区が含まれる。豫西丘陵と平原部の間に位置する。このような地理的環境に建設される陂

の型式は「谷締切型貯水池」である。⁽³⁸⁾ それらの陂の主水源は高山山系から発する汝水と潁水で、これらの河川は河水の影響を受けることはほとんどない。宋代の一・二二八年以降、清代の一八五五年に至るまで黄河下流は淮水に入るが（黄河奪淮）、この時でも、汝水に黄河の水が流入することはなかった。十三世紀後半（元代）・十四世紀末（明初）に、潁水は黄河に河道を奪われたが（奪潁入淮）、それは鴻溝（浪湯渠）や賈魯河を通じて流入し、沈丘（漢代の項遺）から潁水に入るといふ経路であって、潁水上流に黄河の水が流入することはなかった。⁽³⁹⁾

淮北平原東部にはB・D地区が含まれる。まずは澤の分布が多く見られるC・D地区から見てみよう。C地区の西端は開封市北の現在の花園口付近で、そこは洛陽の北を東西に走る邙山が途切れ、広大な東方大平原への出口にあたる。西には項羽と劉邦が対峙した広武山があり、その漢覇二王城遺跡の間にある浸食溝が鴻溝すなわち『水経注』の渠水（浪湯渠）である。歴史的にみると花園口付近から東に流れる黄河は二千年間、約一一〇度の角度で時には東北流し、時には東南流した。この地区にある澤は河川が溢れることにより形成された。例えば、滎澤は『尚書』禹貢には「河溢為滎」とあり、その注に「濟水河に入り、並流すること十數里、而して南して河を截ち、又た並流すること數里して溢れ、滎澤と為る」とある。⁽⁴⁰⁾ 滎澤周辺の浚義は前述したように低地（もしくは窪地）に位置し、河水もしくはその支流の濟水が増水すると自然堤防を越えて後背湿地が形成される。この後背湿地が澤である。つまり、黄河の水の増減とこの地区の澤の形成は相関関係にある。もうひとつの澤が多く分布するD地区は東に山東丘陵、東南に芒碭山があり、西から東へは濟水が流れ、東南方向へは睢水が流れている。澤はこの河川が丘陵にぶつかる際に水が滞留することによって成立したものである。濟水・睢水は黄河水系の一部であり、黄河の水量によって澤の拡張がおこる。たとえば、『史記』夏本紀集解には孔安国曰く「明都は澤名なり、河の東北に在り、水流沃してこれに被る」、『史記』河渠書集解では如淳曰「瓠子決して、鉅野澤に灌ぎ、溢れしむなり」とある。

総じて淮北平原東部は黄河水系の一部をなしており、淮水よりも河水の影響を受けることの方が大きい。澤は通常、横溢した河水を都市に侵入させない遊水池の役割を果たしたと考えられる。また、こういった澤をつないで鴻溝などの運河を建設し、戦国期以来、淮北平原は水上流通の中心地域となった。ここに淮北平原西部のように多くの小規模な溜め池が造られた場合、河水が大規模な氾濫をおこすと、一気に多量の水が河水から流れ込み、水害の原因となってしまう。それゆえ、陂による開発はこの地域の地理環境に適していなかった。逆に、大量の河水が流入した時に、できるだけスムーズに流水できるように渠もしくは溝が開削された。以上のように河水の影響を受けない淮北平原西部には陂による開発が進み、河水の影響を直接受ける東部では自然の遊水池としての澤が残存していたと考えられる。

B地区は潁水よりも東に位置するが、後漢代に入って、二件の陂が建設された。この地区は泗水・獲水（汧水）・睢水・沂水・淮水などの黄河水系・淮河水系の河川が集中的に集積する平野部に位置しており、この地域の陂は淮北平原西部と異なり「平野部での自然堤防型貯水池」である。⁽⁴²⁾ 二つの陂のうち、蒲陽陂は後漢章帝元和年間ごろ（八四〜八七年）に修建された。ちようど、このころ、章帝元和元年（八四年）二月に以下の詔が出された。

牛疫ありてより已来、穀食連にしまり少なきは、良に吏の教え未だ至らず、刺史・二千石以て負と為さざるに由る。

其れ郡国に令して人の田無く、它の界に徙り肥饒に就かんと欲する者を募らしめ、恣にこれを聴せ。在所に到れば、公田を賜給し、為に耕備を雇い、種餽を貸し、田器を貸与し、租を収むる勿きこと五歳、筭を除くこと三年。其の後、本郷に還らんと欲する者は、禁ずること勿かれ。（『後漢書』章帝紀⁽⁴³⁾）

とある。「牛疫」はウシがかかる感染症で、永平十八年（七五年）と建初四年（七九年）に発生した（『後漢書』章帝紀）。これによって穀物の収穫量が激減したため、田の無い者ではかの県に移動して食糧にありつこうとする

者を募り、移動先では公田を与え、種子や農具を貸与し、五年間の田租と三年間の算賦を免除した。つまり、多くの人々が移動を許され、そして移住先では大規模な農地開発が急激に行われたと考えられる。国の方針として広域での大規模な開発が奨励されたのである。この詔が出された前年の章帝建初八年（八三年）には淮南で王景が廬江太守となり、その後、芍陂を灌漑に利用し、犁耕を教え、それによって耕地面積が倍増した。この農地開発もこの詔と深い関連性があると考えられる。⁽⁴⁴⁾ 淮北平原でも淮南と同様に大規模開発が促され、陂を建設するのに適していないところはまだ陂が建設されることとなった。そのあらわれが蒲如陂と蒲陽陂であった。また、『文選』巻五九「沈約齊故安陸昭王碑文」李善注引『東觀漢記』魯恭伝に「魯恭中牟令と為る。宿訟・許伯等、陂澤の田を争い、積年、州郡決せず」とあり、中牟県では陂澤の田が係争地となっていた。河南郡中牟県には圃田澤があり、滎陽とともに河水の丘陵部からの出口付近の大規模な山林藪澤が広がる地区である。そこに陂澤の田があるということは、澤に陂を建設して、農地とした土地を争っていることを意味する。『後漢書』魯恭伝によれば、このことは建初初年から七年にかけてのことで、ちょうど牛疫の流行している時期にあたる。ここでも急速に澤に陂を造り農地化する開発がすすめられた。⁽⁴⁵⁾

以上の考察から、漢代には淮北平原西部の丘陵と平原の境界部分に陂が建設され、淮北平原東部の河水の影響を受けやすい地区では多くの澤が分布し、陂は建設されなかった。しかし、後漢代に至り、牛疫をはじめとした災害が頻発する中で、食糧生産を増加させる目的で、それまで陂が建設されなかった淮北平原東部にまで陂を建設することとなった。

五 おわりに

以上で本稿の考察を終了し、全体をまとめておきたい。まず、淮北平原のなかで潁水以西を淮北平原西部、東を淮北平原東部と設定し、淮北平原に建設された陂と分布した澤のデータを整理した。その結果、淮北平原西部には澤は分布しておらず、そのかわり多くの陂が建設された。西部の主な河川は汝水・潁水でこれらは河水の水量の影響を受けることはほとんどなく、多くの陂をそれらの水系に建設しても、水害を引き起こす原因とはなり得なかった。これに対して、淮北平原東部では多くの澤は分布するものの、陂は建設されなかった。澤は河水・濟水が沿岸の自然堤防を越えて形成された後背湿地、もしくは河水水系の河川が山東丘陵と衝突して形成されたもので、河水の強い影響を受ける。そのため、多くの陂を建設した場合、河水が一旦氾濫すると洪水を起こしてしまうと考えられる。それゆえ、前漢代には溝・渠が建設されることはあっても、陂は造られなかった。しかし、後漢代に入り、牛疫をはじめとした災害が発生し、大規模な農地開発による食糧生産が必要となった。そのため、以前は陂を建設しなかった淮北平原東部の多くの澤が分布する地区においても陂が建設されるようになった。以上の結果から、杜預が上疏文において述べた漢代淮北平原の開発方法はおよそ当を得ていたと言えるだろう。つまり、前漢では淮北平原西部にのみ陂が建設され、淮北平原東部には陂が造られなかったことは、現地の地理的環境に適した開発の方法であった。ただし、杜預は魏代以降、乱開発がすすみ、平原に多くの陂が建設されたとしているが、陂の建設に適さない淮北平原東部における陂の建設が始まったのは魏代ではなく後漢代のことであった。その点に関しては杜預の見解に多少の誤りがあると言えるだろう。

注

- (1) 咸寧四年の杜預上疏については、拙稿「魏晉期淮北平原の地域開発——咸寧四年杜預上疏の検討——」『史学』七〇—三・四号、二〇〇一年、参照。
- (2) 陂の定義については、たとえば、西山武一は陂を傾斜地で谷川を堰き止めるダム型式の貯水池と定義する（『中国における水稲農業の発達』『農業総合研究』三一—、一九四九年、のち『アジア的農法と農業社会』東京大学出版会、一九六九年所収）。また、福井捷朗は陂を①丘陵段丘状の小溜め池②平野出口の谷縮切型貯水池③平野部での自然堤防型貯水池と三種類に分類している（『火耕水耨の議論によせて——ひとつの農学的見解』『農耕の技術』三三号、一九八〇年）。
- (3) 澤に対する人間のかかりかたに関しては拙稿「中国古代の山林藪澤——人間は自然環境をどう見たか」『学習院史学』四三三号、二〇〇五年参照。
- (4) 秦漢時代の陂について論じたものとしては、佐藤武敏「古代における江淮地方の水利開発」『人文研究』一三一—七、大阪市立大学文学会、一九六二年、「江淮地方の水利開発」『歴史教育』一六一—一〇、一九六八年、木村正雄「陂渠灌漑」『中国古代帝国の形成——特にその成立の基礎条件——』不昧堂書店、一九六五年（のち、二〇〇三年に比較文化研究所より新訂版刊行）などがある。
- (5) 本稿の地名比定は特別な注記のないかぎり、譚其驥主編『中国歴史地図集第二冊』地図出版社、一九八二年によった。（以下『中国歴史地図集』とする）
- (6) 初汝南舊有鴻隙大陂、郡以為饒、成帝時閔東数水、陂溢為害、方進為相、与御史大夫孔光共遣掾行視、以為決去陂水、其地肥美、省堤防費、而無水憂、遂奏罷之。（『漢書』翟方進伝）
- (7) 是後民失其利、多致飢困。時有謠歌曰「敗我陂者翟子威、餒我豆、亨我芋魁。反乎覆、陂當復」（『漢書』翟方進伝）
- (8) 鄧晨（鄧晨）復為汝南太守……晨與鴻郤陂数千頃田、汝土以殷、魚稻之饒、流衍它郡。（『後漢書』鄧晨伝）
なお、『北堂書鈔』卷三十九引『東觀漢記』鄧晨伝には「鄧晨陳留郡と為り、鴻郤陂を興し、数千頃を益す」とあり、陳留郡と記載されている。
- (9) 汝南旧有鴻郤陂、成帝時、丞相翟方進奏毀敗之。建武中、太守鄧晨欲修復其功、聞楊曉水脈、召與議之。晨大悦、因署楊為郡水掾、使典其事。楊因高下形勢、起塘四百餘里、数年乃立。百姓得其便、累歲大稔。（『後漢書』方術・許楊伝）
- (10) 熊會貞は『後漢書』許楊伝に「塘四百余里」とあることから、鴻郤陂は淮水の北から汝南県（清代）の東に至るまでの範囲にあったとする（『水経注疏』）。『中国歴史地図集』では熊氏の説に従って、清代の汝南県

の東から南は淮河までと示されている。なお、鴻郤陂のその後について、熊會貞は「三月、京師大いに飢え、民相い食む……癸巳、詔して鴻池を以て貧民に假与す」(『後漢書』安帝紀)とあることから、後漢中期には陂池としては保持されずに、廃されたと考ええる(『水経注疏』)。しかし、この鴻池は『後漢書』の注に「續漢書』曰く『鴻池は洛陽東二十里に在り』とあり、洛陽東にある池を示すもので、鴻郤陂を示すものではない。すなわち、『水経注』時期までは実際に残っていたが、『元和郡県図志』では過去の遺跡として記載されていることから、『水経注』の時代から唐代にかけて廃されたものと考えられよう。

- (11) 何敞為汝南太守、修治銅陽之舊陂、溉田萬頃、墾田三萬餘、咸賴其利、吏民刻石、頌敞功德。(『北堂書鈔』卷七四引華嶠『後漢書』何敞伝)

- (12) 漢靈帝建寧二年、新蔡長河南綏氏李言上請修復青陂……灌漑五百餘頃。(『水経注』汝水注)

- (13) 長房辞掃、翁與一竹杖曰「騎此任所之、則自至矣。既至、可以杖投陂中也」(『後漢書』方術・費長房伝)
- (14) 時汝南葛陂賊萬余人攻少不敵、力戰疲極。(『三國志』魏志・許褚伝)

- (15) 有先人草盧結于岡畔、下有陂田、常肆勤以自給、非身所耕漁則不食。(『後漢書』周燮伝)

- (16) 『太平御覽』卷八二引華嶠『後漢書』周燮伝では

「陂田」ではなく、「陵田」とあることから、堤防もしくは丘陵につくられた田と考えられることもできる。

- (17) 後拜汝南太守。郡多陂池、歲歲決壞、年費常三千餘萬。豈乃上作方梁石洫、水常饒足、溉田倍多、人以殷富。(『後漢書』鮑昱伝)

- (18) 『北堂書鈔』卷七四引司馬彪『統漢書』鮑昱伝には、「鮑」豈為汝南太守、郡多陂池、水恆不足、作方梁石洫、止之、水方足也」とあり、常に水不足に陥っていたために、石の溝を造り、それをくい止めた。

- (19) また、『水経注』淮水注引『十三州志』には、「漢和帝永元九年、汝陰を分けて置く。陂塘多く、以て稻を溉す、故に富坡県と曰うなり。」とあり、後漢中期に富坡県周辺には陂塘が多く建設されていた。この富坡県は『漢書』地理志の富波県を指し、また、『三國志』呉志・呂蒙伝には「汝南富陂の人なり」とあり、「富坡」は「富波」・「富陂」とも記された。富陂県は滄水と支流の澗水との間に位置する。

- (20) (灌) 家累数千萬、食客日数十百人、陂池田園、宗族賓客為權利、橫於潁川。(『史記』魏其武安侯列伝)
- (21) (元和) 三年、遷下邳相、徐縣北界有蒲陽坡、傍多良田、而堙廢莫修。(張) 禹為開水門、通引灌漑、遂為孰田數百頃。(『後漢書』張禹伝)

- (22) その大きさは、『後漢書』張禹伝注引『東觀漢記』に、「蒲陽」坡水の廣二十里、徑且百里、道の西に在

り、其の東田萬頃可り有り。」とある。

- (23) 『爾雅』釈地の中で、淮北平原に位置していたと考えられるものは、魯の大野・宋の孟諸・鄭の圃田があり、『周礼』夏官職方氏では豫州の圃田・青州の孟諸・兗州の大野、『淮南子』墜形訓では晋の大陸・鄭の圃田・宋の孟諸が見られる。

- (24) なお、『東観漢記』・袁山松『後漢書』では「長垣澤」、『續漢書』・『後漢紀』・『水経注』濟水注では「長羅澤」とある。前漢時代の長羅県は長垣県のやや北にあった県で、『中国歴史地図集』による)、両県の中間にこの澤があったと考えてよいだろう。

- (25) (浚儀) 県有倉頡・師曠城、上有列僮之吹臺、北有牧澤、中出蘭蒲、上多僞鬻、衿帶牧澤、方一十五里、俗謂之蒲関澤、即謂此矣(『水経注』渠水注引『陳留風俗伝』)。なお、『陳留風俗伝』は後漢・圈称の撰で、『旧唐書』経籍志)、後漢代の地方志のひとつである。のち佚文となり、現在は『水経注』などの引用文として見られるのみであるが、後漢時代の陳留郡の様子を示す有効な史料といえる。

- (26) 『水経注』渠水注引『陳留風俗伝』には「梁孝王増築」とあり、また、『太平御覽』卷一七八引『郡国志』には、「汴城上有列仙吹臺、西有牧澤、甬道二百里。漢梁孝王所造。今謂之赤堤」とある。

- (27) 漢文帝封孝王子梁、孝王以土地下溼、東都睢陽、

又改曰梁。(『水経注』渠水注)

- (28) 『史記』魏世家には「(魏恵王十六年) 侵宋黄池、宋復取之」とあり、韓世家には「(韓昭侯二年) 宋取我黄池」とある。

- (29) 楊倫字仲理、陳留東昏人也；遂去職、不復應州郡命、講授於大澤中、弟子至千餘人。(『後漢書』儒林・楊倫伝)

- (30) また、『後漢紀』桓帝紀には「陳留の人、夏馥；郡内多く豪族あり、奢にして薄徳なり、未だ嘗て門を過ぎず。躬ら澤畔を耕し、経書を以て自ら娛む。」とあり、具体的に位置する県名は不明であるが、これも陳留郡における澤の事例のひとつといえる。

- (31) 『史記』夏本紀正義引『括地志』に「荷澤は曹州濟陰縣東北九十里定陶城の東に在り、今は龍池と名し、亦た九卿陂と名す。」とあり、この付近には漢から唐代に至るまで何らかの貯水池が存在していたことがわかる。

- (32) 孫期字仲瑛、濟陰成武人也。；家貧、事母至孝、牧豕於大澤中、以奉養焉。(『後漢書』儒林列伝・孫期伝)

- (33) 『水経注』濟水注には「柯澤」、「水経注』濟水注引『左伝』には「阿澤」とある。

- (34) 『史記』高祖本紀には「大澤之陂」とある。この「陂」について、『漢書』高帝紀注には「蓄水、陂と曰う。蓋し澤陂の隄塘之上に於いて休息して、寢寐する

なり。」とあり、「陂」は大澤の中の貯水池そのものを指すもので、劉邦の母はその周囲にある隄塘（堤防）の上で休息していたとしている。前掲注（四）佐藤等の諸論文でもこの「陂」を陂池そのものと解して、陂のデータの一例としている。しかしながら、「陂」には池澤の堤を示す場合があり、この「大澤之陂」は「豊原にある大澤の堤防」と解した。

(35) 獲水又東逕長樂固北、己氏隄南、東南流逕于蒙澤
『水経注』獲水注

(36) 『史記』夏本紀では「明都」、「爾雅」積地及び『左伝』では「孟諸」、「周礼」では「望諸」、「尚書」は「孟猪」とある。

(37) 河南省文物考古研究所編『永城西漢梁国王陵与寝園』中州古籍出版社、一九九六年、参照

(38) 前掲注（2）福井論文。

(39) 鄒逸麟編著『中国歴史地理概述』福建人民出版社、二〇〇〇年参照。なお、近年、黄河下流の河道変遷と中国社会の歴史とのかわりを論じたものに、浜川栄「黄河変遷史から見た中国社会の側面」（『早稲田大学高等学院研究年誌』四五号、二〇〇一年）、小林善文「生態環境より見た黄河史」（『神女大史学』二〇号、二〇〇三年）がある。また、拙稿「黄河の断流—黄河変遷史からの視点」（『アジア遊学』七五号、二〇〇五年も参照）。

(40) 張馭靈「漢王城・楚王城初歩調査」（『文物』一九七三年一期）参照。なお、一九九九年八月六日から十九日まで、淮北平原に位置する亳州・商丘・鄭州・開封・徐州の諸都市を本稿執筆の事前調査のため訪れた。

(41) このほか、『漢書』地理志には「沈水河東垣縣東の王屋山より出で、東して河に至り、内武德河に入る、洑れて榮と為る」とあり、沈水は濟水のこと、濟水が河水と合流し、あふれて榮澤が形成されたことがみえる。

(42) 前掲注（2）福井論文。

(43) 自牛疫已来、穀食連少、良由史教未至、刺史・二千石不以為負。其令郡国募人無田欲徙它界就肥饒者、恣聽之。到在所、賜給公田、為雇耕傭、賃種餽、貰与田器、勿收租五歲、除筭三年。其後欲還本郷者、勿禁。

〔後漢書〕章帝紀

(44) 王景の芍陂開発に関しては拙稿「中国古代淮南の都市と環境—寿春と芍陂—」（『中国水利史研究』二九号、二〇〇一年）。

(45) 榮澤に関する『史記』夏本紀集解に、「鄭玄云う『今塞きて平地と為る、榮陽の人猶ほ其の処を謂うに榮播と為す』と」とある。この記載から榮澤全体が湿地ではなくなったとは考えがたいが、前漢末期に少なくとも榮陽付近の榮澤の一部では周囲を塞いで干拓し、農地化する開発がすすんでいたことがわかる。

The regional development of the Huaibei (淮北) Plain during the Han Dynasty

MURAMATSU Koichi

Key word: ancient China, Han Dynasty, *Huaibei* plain, regional development, nature

DuYu (杜預) reported the development of the Huaibei plain in the Wei-Jin period. In this report, he showed the manner in which the Huaibei plain developed during the Han Dynasty. This thesis aims to verify the accuracy of his opinion using concrete historical materials. In this thesis, I focus on Zhe (澤) and Bei (陂). Bei is an artificial pond, while Zhe is an untouched natural environment. Through the dates of Zhe and Bei in the Huaibei plain, I understand that Bei was constructed in the eastern part of the Huaibei plain, but Zhe did not exist at that time. On the other hand, in the western part of the Huaibei plain, although Zhe existed in abundance, Bei had not been constructed. One of the Zhe found in the eastern part is the back marsh that exceeded the natural levee with river water, forming the branch. Another Zhe was formed by the collision of the River Huang He (黄河) with the Shandong (山東) hill. Zhe was significantly related to the increase and decrease in the volume of the River Huang He. If Bei were to be constructed here, a flood would occur every time the River Huang He would flood. Therefore, Gou (溝) and Qu (渠) were constructed, but Bei was not made. In the Eastern Han Dynasty, since disasters such as rinderpests occurred frequently in various places, Bei was constructed in the eastern part of the Huaibei plain for the purpose of improving food production. However, this development became the cause of frequent flooding in the Huaibei plain.